

ピエール・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ作パンテオン壁画（1874～78）について―壁画の構想に関する一考察

江澤 菜櫻子（早稲田大学）

本発表は、ピエール・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ（1824～98）が1874～78年に描いたパンテオン壁画の再解釈を試みるものである。この壁画は、美術長官シュヌヴィエール侯爵（1820～99）が1874年に立ち上げた装飾計画の一環として、パリの守護聖人ジュヌヴィエーヴを主題に制作された。壁面の大部分を占める下部区画には《少女聖ジュヌヴィエーヴの祈り》及び《少女聖ジュヌヴィエーヴの牧歌的生活》が、上部区画には《信仰、希望、慈愛》及び《諸聖人たちの行列》が置かれる。

これらの内、壁画の主要部である下部区画の2作品は、ゴシックやイタリア・プリミティヴの壁画との類似性が指摘されてきた。この作風について、ピュヴィ研究の第一人者であるエメ・ブラウン・プライスは、ピュヴィが19世紀当時の反教会勢力の存在を視野に入れ、教会権力によらない純粹無垢な古代の信仰を表現したものと解釈している。一方、上部区画の2作品に関する論考は少なく、その多くが19世紀当時の作品批評を繰り返すに留まる。すなわち先行研究では、下部区画と上部区画を分断して論じてきた。これに対し本発表では、全4作品を包括的に捉えた解釈を行う。

また、先行研究では、シュヌヴィエールの装飾計画に基づいて壁画が制作されたとは指摘されるものの、装飾計画によらない画家独自の構想が存在する可能性については殆ど言及されていない。しかしながら、ピュヴィの壁画と装飾計画とを改めて比較し、とりわけ当時知られていた聖ジュヌヴィエーヴ伝の説話内容と照らし合わせると、本作品におけるピュヴィの制作意図が明らかになる。

シュヌヴィエールの装飾計画は、普仏戦争での敗北とパリ・コミュンによる荒廃を背景として、国家の威信回復を図る愛国主義的性格を有していた。ピュヴィはこのことを十分考慮に入れながらも、自身の独創的解釈を多分に盛り込んだのである。下部区画においては、聖女伝の中には見つけることの出来ない《少女聖ジュヌヴィエーヴの祈り》の主題を生み出し、聖女が持つ生来の聖性を表現している。また、最も大きな面積を占める《少女聖ジュヌヴィエーヴの牧歌的生活》でも、聖ジュヌヴィエーヴがパリの救済者であることを強調する。

更に、上部区画の壁面において、装飾計画では下部区画の主題とは特に関連性のない聖人たちの行列が表されることになっていたのに対し、ピュヴィは上部区画の中に聖ジュヌヴィエーヴを表すモチーフを描き込むことで、下部区画との間に連関を生んでいる。これによって、上部区画は下部区画の主題を補強するような役割を担う。すなわちピュヴィは、下部区画と上部区画を分断せず、むしろ1つの集合体と捉えた上で、生来の聖性を持つ聖ジュヌヴィエーヴが将来のパリを救済するというテーマをとりわけ強調して描き出している。

本壁画においてピュヴィは、シュヌヴィエールにより与えられた装飾計画をふまえながらも聖ジュヌヴィエーヴの救済を強調する独自のプログラムを加えることで、荒廃したパリの人心を鼓舞するためのきわめて効果的な表現に辿り着いたのである。